

VI. まとめと今後の課題

今回の試行のようにパソコン通信を利用しての意見交換及び共同執筆は、各委員にとっては初めてのことであり、現行のシステムを利用しての意思の伝達が難しいことを感じとることとなったようである。これは、従来行ってきた教材作成の作業形態を新たなものへ転換させる抵抗感が委員各人に少なからずあったためと思われる。例えば、今まで個人で行ってきた作業をグループによって共同で行う形態に変えること、それによる委員間の意思疎通のためにコミュニケーションの必要性が発生したこと、そのコミュニケーションをパソコン通信のキーボード入力による文章を利用したものによること等が抵抗感の原因として上げることができる。そして、その根元的な要因として時間的な余裕と充実した作業環境がないためではないかと思われる。しかし、これらの問題点については、委員各人の努力によって解消できた部分も多くあった。

教材を共同で開発することは、訓練の内容を短期間で質の高いものとするために必要なことであり、作業分担による労力の軽減、他指導員との情報交流による付帯的情報の入手等の効果を期待できるものである。そのためシステムの問題によるコミュニケーションの不都合は、是非解決しなければならない問題であり、既にグループウェアシステムとして音声及び動画の伝送を併用したもの、資料及び提示物を共有できるもの等の技術的な問題を解決しているものがあるので導入とそれを利用した教材開発体制の検討をすべきである。

また、現状のUITnetを利用したシステムであっても教材作成の作業分析をし、面会して行う会議と併用することで十分効果が期待できるものと思われる。今回の試行の結果から考慮すると、教材の基本方針の策定のような不確定要素の多い議論は、文章による意見交換では十分な検討が困難であり、面会による形式のものが適すると思われるが、記述に関する調整や技術的問題の質問のように議論が大きく展開しないものについてはパソコン通信でも十分であると考えられる。なによりも同じ専門性、認識を持ったグループが存在することによって、教材作成をはじめとする職業訓練に関する相談が容易にできる環境は貴重なものであることを強く感じたところである。

そのため今回作成した教材をUITnetにアップすることで全国の指導員に使用していただき、その使用結果、改善提案、感想等について意見交換できるフォーラムを設けることとする。そして、その場を利用して教材を改善し、さらに専門性を同じくする指導員のつながりができることを期待したい。

今後は、現状のシステムの中でより効果的に教材開発ができないかさらに検討及び試行することが必要であり、技術的な進歩を見据え将来的にどのようなグループウェアシステムが適当なのか検討し、教材開発支援システム作りに反映していく必要がある。

参考文献

松下温編著「図解 グループウェア入門」(オーム社 1991第1版)

溝口文雄・児西清義編著「チームの知的生産技術 グループウェア入門」(講談社 1992第1刷)

坂田史郎 INR Symposium 1993.6「マルチメディア分散在籍会議システム(MERMAID)とその応用」